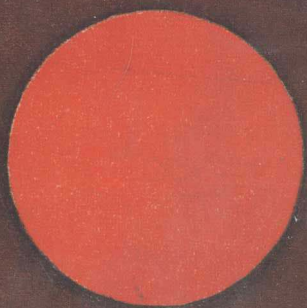
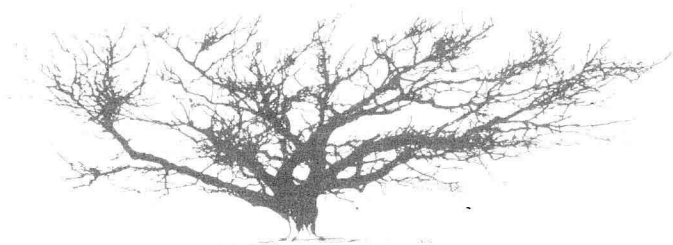


鬼怒川

有吉佐和子



有吉佐和子
鬼怒川



新潮社版

鬼^き
怒^ぬ
川^{がわ}

昭和五十年十一月十日 発行
昭和五十年十二月十五日 二刷

定価九五〇円

著者 有^{あり}吉^{よし}佐^さ和^わ子^こ

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七二
電話 業務部(03)二六六―五一二一
編集部(03)二六六―五四一一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁本は、小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章	綿帽子	5
第二章	黄金伝説	81
第三章	鬼怒川	155
第四章	満月	255

装
画
·
星
囊
一

鬼
怒
川

第一章 綿帽子

一

まっ黒な鶏がク、ク、ク、と鳴きながら庭を横切った。チヨは機から顔を上げた。首は細いの
に胸が急にふくらんで形の悪い鶏を目で追い見送った。機へ目を戻して緯糸に白く染抜いた点々
が、経糸にも染抜いてある無数の点々と一つ一つ正確に交叉するように指先で塩梅してから、梭
を両手に持ち直して向うから手前へ力一杯に二度打込む。このときは腰にも充分な力を入れ、経
糸に張りをもたせるために腰当をしっかりと押えつける。次の瞬間、足が動いていざり機はきし
み鳴り、緯糸のための開口装置が箴の向うで動く。チヨは右から左へ梭を走らせ、打込みは音を
たてて二回、そして機はまたきしんで経糸を組みかえる。左から右へ梭が走り、今度はまた経緯
の括りめが交叉するので丁寧な目を合わせる。チヨが織っているのは細かい十字緋で、東京へ出
れば蚊緋と呼ばれる紬であった。

庭にまたまっ黒いものが動くのを感じてチヨは顔を上げた。今度は鶏でなく、大きな人間だっ
た。どうしたわけか村長がフロックコートを着て山高帽をかぶるといふ正装でこちらへ歩いてく
る。はて今日は何の日であったか。どこの家に葬式があったかとチヨは考えた。村長はチヨが目
を上げる前からチヨの方に視線を向けていたらしく、顔を横にひろげて笑った。

「おチヨ、父つつあは居るかね」

「お父つつあは緋し、ばりが終ったで藍屋へ出かけっちが」

「そんなじゃまずかったな、いい話で出かけて来ただがね。お袋は居るかね」

「お母、村長さんが来たぞ」

チヨは暗い家の中に向って大声を出した。機は日の当る南側の縁に置かれている。そこで終日機織りしていると、家の中はまっ暗に見える。チヨの母親は上り框で、竹製のつくしを立て、芋桶を手前において、つくしの頭に白くからみつけた真綿から両手の指を使って糸を紬ぎ出していた。日がな一日同じ姿勢で、指先に唾をつけては紬ぎ糸をひき出し、糸を芋桶の中に繰込んでいた。で、俄かに呼ばれてもすぐ立上ることができない。

「おや村長さんかね。あれ山高帽かぶってどげしただね。どっかで芽出てえことでも有ったかね」

チヨの母親は、こちらを眩しげに振向いても、べたんと坐ったままだった。

「ううむ、芽出てえことで出かけて来ただ。与助は留守だっちが」

「昼飯喰ってすぐ出たがら、もうじき帰って来るべ。何か家のお父に用かね」

「んだが、まあ待つべ」

村長は縁側に腰をおろし、チヨの斜め前で機嫌のいい顔をしている。チヨはどうして村長がチヨの顔から目を逸らさないのか訳が分らないから挨拶に困って、ともかく機織りを続けることにした。梭が音をたてて動く度に、藍の色濃い糸が大きく動いて、小さな蚊絆がまるで花模様のように踊る。村長が山高帽を取って縁側に置き、縞のズボンのポケットから手拭を引っぱり出して顔から頭へ拭き上げた。

「おチヨッ子は今年幾つになるだかな」

「十六です」

「十六か、やっぱり。ううむ、やっぱりんだっちか」

チヨの母親がようやく湯呑みに茶をくんで村長の前に運んできた。

「からっ茶だがね」

「うむ」

村長は湯呑みを鷺掴みにして、がぶりと音をたてて飲んだ。

「おチヨッ子は十六になったそうだな。ついこないだまで子供だと思っていたが、大したものだな」

「なはまだ十六ぐれでは子供だよ、村長さん」

「いや十六ならもう立派な嫁になれるうちに」

チヨの母親は、ひよいと息を呑み、まるで怖いものでも見るような眼になって村長の顔を見たが、村長はすぐ話題を変えた。

「なんだな、明治八年だっけかな、京都の博覧会で貰ったのは、お前のお母だったなあ」

「へえ」

「大したものだな、おチヨッ子は。立派な血筋だわね」

「何を言っちゃってか、俺だちのような貧乏百姓に血筋みてなのあるわけがね」

「それこそ何を言っちゃうか、この小森ではおチヨッ子の織る蚊衾が一番評判がえだぞ。目が揃ってムラがねといって評判だぞ」

「それはお父の衾しぱりが上手からだ。チヨの手柄でねだから」

「なんぼ衾しぱりが上手え男がいても、織り子が下手なら十字が出合わねで、蚊衾がぼうふらになるでねだか。おチヨッ子が上手のは血筋だわさ」

チヨは目の前で自分のことが、それも村長と母親の二人で取沙汰されているので恥しく耳が火

照っていた。逃げ出すわけにもいかなかったので、機を織り続けていた。いざ、機は他土地の高機な
どと違って、足も腰も力を入れて動かす上に、他処では箆を使う打込みも、この土地では一尺五
寸もある大きな櫓の木で作った梭を使うので、そして力一杯二度ずつ打込むので、全身の運動に
なる。冬でも単衣を着てやる作業なのに、春が来ていて、今日は珍しく風もない温かな一日だっ
たから、チヨは全身に汗をかいていた。いったい村長は何をしにこの家にやって来たのだろうか
と梭を打込みながら考えると、また顔が熱くなった。チヨが十六歳で、十六なら立派な嫁になれ
ると村長がたった今言ったのを思い出したからである。

チヨの父親が帰って来るまで村長は上機嫌で四方山話を続けていたが、相手をしているチヨの
母親の声は沈みがちで、相槌を打つのも億劫な様子がチヨの耳にも聞きとれた。

チヨの父親が帰ってくると、村長は立上って山高帽を頭にのせ、気取った顔をして家の入口か
ら中へ入った。ときどき声高に喋り、チヨの両親たちの声はチヨには聞こえないほど低かった。
チヨは気にはなつたけれど手を止めると盗み聴きしていると悟られるだろう。それに話の内容に
察しがついてきたものだから、一層恥しくなつて、いよいよ汗をかきながら一生懸命で機を織つ
た。ボタンボタン、ぎぎイ、ボタンボタン、ぎぎイ。目を凝らして蚊紝の経と緯を組み合わせる
のが、だんだん難かしくなり、手先が狂う。チヨは梭を引き抜いて二度も三度もやり直した。

「おチヨ、達者でな。また逢うべ」

村長は山高帽を片手で持上げ、チヨに振って見せ、上機嫌で帰って行ったが、家の中は夕餉ど
きが来ても火の気も立たなかった。

村長はチヨに縁談を持って来たのだった。

「俺げでは死んだに、生きて帰ったげに嫁にいかすつちなあ、俺はどうも気がすすまねなあ」
「俺げでも生きて帰ってれば、喜んで嫁に出せたかもしれないが、俺も気が重え。村長さんが十六

なら立派に嫁に出せると言ったときから俺あまりいい気がしねかった。いつかは嫁にやんねばなんねとは思っていたつちが、よりによって兄^{あに}さが戦死したげ、つから嫁とることはなかんべに」「戦死したから生還した家に嫁にやれば、お前も息子が生きて帰ったと思えるべと村長さんは言うちつたが、妙な理屈だな」

「んでも山高帽かぶって来ただからな。断われねべ。断われっか」

「二〇三高地の生き残りだつち。よっぽど運の強え男だんべ」

「お父は断わらねえ気だな」

「俺^{おれ}げのガキや運がなかったんだべ。二〇三高地でも生き残る兵隊がいただつちに」

「お父は断わるのか、どげするっかちつてんによ」

「俺^{おれ}、知んね」

夕闇が迫って、藍地に白い蚊^{ぶん}紺^{こん}は糸目を合わせるのが出来なくなっていたが、チヨは機から降りることが出来ず、音も立てられずにいざり機の中で身をすくませていた。チヨの兄が戦死したのは明治三十七年の二月九日であった。日本政府がロシアに対して国交断絶を通告したのが二月六日。日本が正式にロシアに対して宣戦布告したのは二月十日であり、同時に大詔^{たいしう}が渙^{かん}発^{はつ}された。が、チヨたちが戦争の始つたのを知つたのは十二日であり、チヨの家では新聞をとっていないので、チヨの弟が小学校から帰つてきて知らせたのである。チヨの兄が徴^{けい}兵^{へい}検査^{けんさ}に合格して海軍に入つたのは前年の秋だったので家にいなかったし、日清戦争以来十年も戦争はなく、検査の後で入隊するのは若者に当然の習慣だから、働き手がとられるので困りはしたが、海を一度も見たことのないチヨの兄は海に憧れていて志望を書込む欄に海軍と書いたのだった。

戦争が始つたといつてもチヨの家では別に驚かなかった。チヨの父親は日清戦争のときにはもう二人の子持ちだったし、その頃はどの家でも長男は徴兵の枠外におかれていたので、今度も関

係がないと思つたのである。開戦と同時に赫々たる戦果をあげている有様を、チヨの弟が小学校の校長から朝礼の度に聞かされて、家に帰ると得意そうに喋べったが、一家は他人事のように聞いていた。日清戦争にも勝ったから、今度も負けることはなからうと思つていた。一度だけチヨの母親が息子の身を案じたが、

「長男でねだか。直に帰るべ」

父親はこともなげに言い、それでも誰も心配しなかった。

戦死の公報が入つたのは、三月一日であつた。役場の戸籍係が息を切らして知らせにきたが、あまりに思いがけなかつたので一家は声も出なかつた。いつ何処で死んだのか、よく分らない。詳細は五日遅れて届き、二月九日の旅順大海戦のときだという。村役場に駆けこんで新聞を読ませてもらったが、二月十二日付の記事に「旅順大海戦公報」というのがあつて、「聯合艦隊は去六日佐世保を出発したる後、総て予定の如く行動し、八日正午我駆逐艦は旅順にある敵を攻撃せり、……我艦隊は九口午前十時旅順港口に達し、正午より約四十分間港外に残留せる敵艦隊を攻撃せり、此攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも……此攻撃に於ける我艦隊の損害は軽少にして、寸毫も戦闘力を減ぜず、死傷は約五十八名にして内戦死は四名……」チヨの両親は狼狽してゐて、殊に母親の方はほとんど文字が読めないで、記事を見つけたのは役場の書記だった。何しろ村でも最初の戦死者だったから、村長も出てきて、狭い役場はいつの間にか人が一杯に詰めていた。

「妙でねけ、戦争は十日に始つたに、九日に戦死すつとはね」

「宣戦布告が十日だべ。うむ、妙だぞ」

「まっと妙だぞ、こりゃあ。官報の方には我艦隊ハ損害ナク、又一ノ死傷者モナシ、我軍氣大ニ振フと書いてあつぞ。やっぱ、九日正午だがね」

集った連中の方が熱心に新聞を読み返し、二月二十八日付の新聞に報道された旅順港口閉塞の壮挙に沈没した乗組の勇士として有馬良橘中佐、広瀬武夫少佐以下二等水兵から四等機関兵に到るまで戦死者の名が七十七名漏れなく列挙されているのを発見した。が、宣戦布告前の戦死者の名は、どこにも見つけることができなかった。

「たった四人の中の一人じゃっち、よっぽど運が悪かっただな」

年寄りが、ぼつんと言い、みんな気の毒そうにチヨたち一家を見て、慰めの言葉もないのか一人帰り二人帰りして、最後に村長が、

「日本は必ず勝つに、こりゃあ尊い犠牲だべ。葬式は村でやつから」

と言つてチヨの父親の肩を叩いたとき、チヨの母親もチヨもわつと声をあげて泣き出した。兄さが死んだ。我艦隊の損害軽少という文字の中でチヨの兄は死んだのだった。やがてチヨの弟も火がついたように泣き出し、記事に穴があくほど見詰めていた父親は、うっと唸うなつて新聞に頭を突っこむようにしたかと思うと号泣した。その日の電報新聞には決死隊先登広瀬少佐という大見出しで、英雄の半生が報じられていた。

チヨの兄は二等水兵として戦艦「富士」に乗組んでいた。後に旅順口海戦と呼ばれる戦場で、文字通りの緒戦に旅順要塞の海岸砲台と艦砲の一斉射撃を受け、東郷元帥のいる旗艦「三笠」も戦艦を撃落とされ、三番艦であった「富士」にも二弾命中し、砲術長は即死した。チヨの兄は、砲術長のすぐ傍にいて伝令役をしていたので同時に爆死したという。そういう詳しい話は戦争が終つて、上官からの手紙が届いて分った。

一年半にわたる戦争中、絹川村の小森でも子供たちの遊びといえは必ず戦争ごっこだった。突貫とか攻撃とかいう言葉を口々に叫びあっていたが、チヨの家では誰でもそういう遊びを見ると顔色を変えて家の中に逃げこんでいた。餓鬼大将だったチヨの弟も、戦争ごっこが流行しだして

からすっかり温和おとなしくなってしまった。戦況は連戦連勝で、クロパトキンなどという敵將の名などもチヨたちは知ったが、どの会戦に勝っても、どの要塞を占領しても、チヨの一家には少しも嬉しい話題にはならなかった。

チヨの兄の葬式は、村長が約束通り村葬にしてくれ、県庁からも偉い役人が来て弔辞を読んでくれたし、まずチヨの家だけではとても考えられないような立派な葬式で、棺桶も白木の大きなものが担ぎこまれたが、その中に納められたのは遺体でなく、小さな骨壺と血で黒く染まった水兵帽だけだった。チヨの兄は戦場から葉書を数通よこしていたが、それが親には何よりの形見だった。

「海軍は喰物がいい、飯が旨うめえといいことばっか書いて来ちつちが、ありや当人も死ぬた思ってたねかったがらだべ」

「鬼怒川の水より海の方がどんけえ泳ぎやすいかと書いてきちつちが」

「運が悪かっただな。陸軍の方が戦死は何十倍もあつたつちに」

日本海海戦でロシヤ軍は五千人死んだが、日本海軍の戦死は二百名足らずだった。しかし陸軍は、二〇三高地を落すのに一つの師団を殆ど潰滅させていた。チヨの両親は、ポツンポツンと湿った会話を続けていて、いつまでも板敷の框の上から動かなかった。チヨの弟が風呂敷包を抱えたままで駆けこんできて、

「腹減ったあ。あれ、飯は炊いてねのけ」

と竈かまどに火の気がないので驚いて訊いた。

「まだ炊いてねが、冷飯が残ってるべ」

「んだが湯は……、ああ俺が沸かすべ」

小学校の帰りに道草を喰って暮れるまで遊んできたので、両親の機嫌の悪いのはそのせいだと